

## 備忘録 夢の街跡 第4回 桜井市初瀬を歩く“楠田行展”

皆さま、新年明けましておめでとうございます。昨年はcollectiveに足をお運び下さいまして、誠にありがとうございました。本年もどうぞ宜しくお願い致します。皆さんのおかげでcollectiveは6月に10周年を迎えます。変わらぬご愛顧のほど、お願い申し上げます。

2014年の備忘録は奈良県桜井市からスタートです。同市は三輪の大神(おのみわ)神社や安倍の文殊院、また多武峰(とうのみね)には中臣鎌足を祭る談山(たんだん)神社などがある県中部の都市。人口は約6万人。僕が3歳から住んでいる町です。それでは早速、桜井の色街跡を辿ることに致しましょう。初瀬(はせ)にその形跡が認められました。

市の東に位置する初瀬は真言宗長谷寺の門前町。長谷寺は境内に咲く牡丹の花で有名な西園観音霊場の一つ。小説家の松本清張と、奈良県出身の考古学者で歴史作家である樋口清之は、昭和59(1984)年に発行された観光案内ガイド『奈良の旅』のなかで「五月になると牡丹の花が咲く。そのころになると、女の季節労働者が急に集まってきて、人口がふえてしまう——というので有名なのは、桜井市初瀬の町である」と紹介しています。また、「ここでは仲居さんとよばれている。芸者から女中の仕事まで引き受けて、なかなかいそがしい。恋愛は本人の自由であるから、酒席のあっせんだけでは終わらないばあいも少なくないそうである。〜」とも。僕は地元の興味惹かれる歴史に矢も盾もたまず、ミラに飛び乗り、急行しました。

自宅から国道165号線に出て、西に向かうと初瀬小学校が現れ、近くの初瀬西交差点から門前町ははじまります。「ようこそ長谷寺へ」と書かれたゲートから寺までの細長い道程は約2km。旅館跡には数寄屋風の趣向を凝らした窓を持つ旅館跡も散見され、現役の旅館や草餅屋、道標などもあり、風情のある街並みを楽しむことができます。

長谷寺開山の起源は諸説あり定かではなく、『続日本紀』には神亀景雲2(768)年に称徳天皇が長谷寺に行幸したという記述があり、8世紀半ばには存在していたことは確実だとのことです(『桜井市史上巻』)。観音信仰は平安時代に貴族の間で流行し、長谷寺には紀貫之や清少納言も参詣しています。また鎌倉時代から次第に盛んになった伊勢参りの参宮街道でもある初瀬は、宿場としても整備が進んでいきました。宿には色々な世話をしてくれる仲居さんがいたので、そういう文化も自ずと盛んになったのでしょう。江戸末期の嘉永元(1848)年に、禁止されている「隠し売女」(モグリ売春)を高取藩に咎められた一件もあったよう(『同』)。日帰りが容易ではなかった時代、宿が栄えたことは想像するに難くありません。しかし、僕が子供の頃まで女性街の側面を併せ持っていたとは本当に意外でした。

昭和9(1934)年、大阪通信局が発行した『奈良縣電話番號簿』に掲載されている初瀬の旅館は14軒。芸妓置屋は2軒あったようです。同4(1929)年、旅行家の松川二郎がまとめた『全国花街めぐり』の後編予告で、氏は後編では初瀬を紹介したいとしています。また松本清張が知っていた時代である昭和52(1977)年発行された『桜井市産業名鑑1977』には8軒の旅館業者がいたとの記載がありました。

初瀬を訪れた際、貸し駐車場を営む方と話す機会を得ました。その方によると「戦後は赤線だった」とのことでしたが、当時の初瀬は赤線ではなく、青線地帯。モグリ売春を業者たちが行う集合体でした。

奈良の地方新聞である『大和タイムス』昭和33(1958)年2月21日付には「青線の初瀬に警告＝桜井署＝」と記事があり、それによると「～売春防止法実施を前に県下の青線地帯でもっとも大きいといわれる初瀬町の旅館業者に対し～県下初の警告を出した」との記述があります。当時の旅館業者の数は12。従業員はなんと112人もいたようです。藤井平治という当時の初瀬町旅館業組合長は「赤線地帯が消えると私らの業者が前面に押出されることになるが～売春行為を監督したい。そして明朗な歓楽地帯の実現を期そうと思っている」とコメントを残しています。

新聞を繰る作業で面白いのは、昭和33年4月1日までの売春防止法施行前と施行後の動きを確認することにあります。5月4日付『大和タイムス』には法施行後に売防法違反の事例をまとめて掲載しており、そこには初瀬の旅館「三晴(みはる)」の仲居頭が、他の仲居に客をとらせ、マージンを取っていたことで検挙されたとありました。全然明朗ではない事例に思わず笑いがこみ上げてしまいますね。

因みに自宅にある『13職業別タウンページ奈良県南部版』を見てみると初瀬の旅館は現在、6軒となっています。井谷屋、大和屋、白酒屋、田中屋、備前屋、吉野館。三晴は廃業してしまったようで、現在は街道に遺構を残すのみです。現役の旅館と遺構から、街にあった悲喜こもごもの歴史に想いを馳せて散歩するのも良いものです。今年も良き旅と出会いに願いを込めて。誠

主な参考資料・文献(年代順)  
 『全国花街めぐり』松川二郎／誠文堂(昭和4年)  
 『奈良縣電話番號簿』大阪通信局(昭和9年)  
 『大和タイムス』大和タイムス社(昭和33年)  
 『桜井市産業名鑑1977』桜井市産業振興委員会(昭和52年)  
 『桜井市史上巻』桜井市史編纂委員会／桜井市役所(昭和54年)  
 『奈良の旅』松本清張、樋口清之／光文社文庫(昭和59年)  
 『あお超え伊勢表街道』中村敏文／玉造稻荷神社(平成元年)  
 『13職業別タウンページ奈良県南部版』NTT西日本(平成25年)

## information

今回はゲストDJに中野出をfeature。collectiveの雰囲気にもマッチしたメロウなプレイ、是非楽しんでください。

次回コレクティブは春の開催を予定しています。10周年を皆でお祝いできればと思っています。詳細はブログでご確認下さい。

<http://blog-collective.blogspot.jp/>

## トルコ食紀行 カップドキア編 “mackiart”

Mutlu Yillar! (トルコ語で明けましておめでとう)この年末年始はトルコで過ごしたので全く正月気分を味わうことはありませんでした。ひよっとしたら、まだ年は明けてないのではないかと錯覚してしまいそうになるくらい。特にイスラム教の国なので、非常に厳かで質素な年越しでした。

というわけで、久しぶりにプレスへ登場です。もちろん、トルコ食紀行で！私自身生まれて初めてのイスラム教国でしたので、訪れる前からどんな世界観なのかワクワクでした。中東といえば、サラーム海上さん！なので(私個人的に)彼が最近出版した著書『おいしい中東 オリエンタルグルメ旅』(2013、双葉社)を教科書にしてトルコを大満喫してきたのであります。

旅の始まりはカップドキアから。日本からはアブダビを経由してイスタンブールへ入りました。そこからまた飛行機で2時間弱飛びカップドキアのあのカイセリ空港へ。気温は日本よりも寒く雪がうすすらと積もっていました。私のカップドキアの印象は“熊本は阿蘇山のカルデラ”です。キノコ岩が一面に広がっているのかと思いきや、あの独特な地形は一部だけで、あとは壮大な農地が広がっていました。

実はトルコは農作物の自給率が100%以上の農業大国！カップドキアは小麦、ジャガイモ、かぼちゃにワインが有名です。冬の間は農業ができないので働き盛りの男性はモスク近くにあるカフェに集まりチャイ(トルコの紅茶)を飲みながら一日中話しをしたり、トランプをしたりしています。本当にカフェには男性客がわんさか！これでもかと言わんばかりに集まってのんびりしていました。その空気がとてもカップドキアの雰囲気合っていて、なんだかうらやましくも感じてしまいました。

そんなカップドキアで食べたtasty kebabという食べ物！これがものすっごく美味しく！ケバブというと、日本でもよく見る“あの”ケバブを想像しますが、実は水を使わないで調理する肉料理全般のことをケバブと呼びます。ちなみにtasty kebabは壺に入った煮込み肉料理。シチューに近いものかな？肉と野菜のうまみだけをぎゅぎゅゅと壺に閉じ込めた料理で、味付けは最小限、素材の旨味とハーブの香りが絶品でした。

付け合わせのチキンスープで炊いたライスとの相性も抜群で、おかわり何杯でもいけちゃいそうなほど。牛肉と羊肉のものを頂きましたが、俄然羊肉！向こうの羊は本当に臭みが少なく、さらにハーブやスパイスで香りをより引き立てるので、牛肉では物足りなく感じてしまうほどなのです。「郷に入れば郷に従え」と言わんばかりに、羊を堪能しました。このケバブが気に入ったので、滞在期間3日のうち2日も通ってしまうほどハマってしまいました。日本ではなかなか食べられない味だと思いますが、日本人も絶対好きな味であること間違いなしです。

というわけで、これにてカップドキア編は終わります。続きましてのイスタンブールはまた次回のお待ちください。長々と書き綴りましたが、2014年も“うま”ものに囲まれ、幸せいっぱい。そして“うま”く物事が捗るように活発的に行動していきたいです。皆様本年もどうぞ宜しくお願い致します。

## 「マイブームの顛末」の巻 “itaru waku”

実に久しぶりのpress collective登板となりました。今回も雑記をつらつらと――。

いきなりですが、井上ひさしという人はご存知ですか。有名な小説家、劇作家なので、名前を聞くと水木しげるタッチの特徴ある顔をぱっと思い出す人も多いと思います。その人の小説に昨年ははじめからハマってしまい、しばらく手当たり次第に読み散らかしてきました。

きっかけは、半分くらい読んだきりで積ん読状態にあった『吉里吉里人』を読み直したことです。この小説は、ものすごくざっくりといえば、東北のとある小村「吉里吉里村」がある日突然日本からの独立を宣言するというぶつとんだ設定の物語です。ところが、この騒動の中で展開される、村人たちをなだめ、説得して独立の鎮圧にかかる日本政府と、それに対してあらゆる奇策で対峙する吉里吉里村の狡智とのやりとりは感心と驚嘆の連続で、荒唐無稽でありながらなるほどたしかに国家の肝はそこかと膝を打つところも多々あるという極上のエンターテインメントなのです。なぜ以前これを途中までしか読まなかったのかと過去の自分に疑問を抱くほど、ぐいぐいこの小説に引き込まれ、「こんなに面白いなら他の作品もきっと・・・」と書店の棚を覗きました。

そうしていろいろ読み進めるうちに、直木賞受賞作の『手鎖心中』をはじめとする江戸風俗を描いた作品、『青葉繁れる』をはじめとする自伝的内容の成長物語など、さまざまなジャンルで書きまくっていることをあらためて知りましたが、どれもこれもいちいち面白く引き込まれる物語で、気付くと書店で手に入れられるものもあとは戯曲くらいという状態になりました。

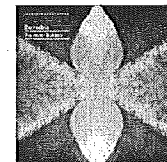
多くの作品が文庫になっているというのに、現在手に入れられるのはその半分以下ではないかという有様で、ト書きは読み慣れず物語を欲していたため、なかば意地になって、中古レコードをデグするのとおなじ気持ちで、ことあるごとに古本屋をのぞいては品切書を買って集めていったのです。そのかいあって、『浅草鳥越あずま床』や『他人の血』など面白そうだなと思っていた書名の本も実際によりやく読むことができました。

こうして読書欲とデグ欲を満たされ、井上作品とがっぷり四つだったのも過去の日々となりつつあったつい先日、たまたま見ている岩波書店のHPでみつけたのは、今秋から『井上ひさし短編長編小説集成』刊行開始との情報。しかもなんと全12巻で単行本未収録作品も網羅してすべてを収めるとあります。なんということか…。あれほど懸命にせせとデグした日々は果たして大資本の前にごもあつけなく打ち砕かれるのかと敗北にも似たさみしさを覚えさせられると同時に、未収録だったものまで読めるのかという新たな楽しみと大いなる興味が湧いてきました。

てなわけで、もしかすると秋からはこの集成に手を出して、12冊の刊行を心待ちにするようなことになっているかもしれません。

## 名曲探訪 tr.007 “kengo matsui”

<Artist> Bonobo  
<Title> Heaven For The Sinner  
<YouTube> <http://www.youtube.com/watch?v=7YrvzRN-U2c>



名曲の構造を愛でて楽しむ名曲探訪、今回は昨年(2013年)リリースのすばらしい楽曲を取り上げます。ニューヨークを拠点に活動する英国人の白人ミュージシャン、サイモン・グリーンによるプロジェクト、Bonoboの“Heaven For The Sinner”です。

Bonoboは英国的な陰のある叙情的なエレクトロニックサウンド、ビートミュージックを得意としています。この曲はErykah Baduをボーカルに迎えた作品で、もちろんその点が最も話題となっているのですが、構造面で見ると、打ち込みのエレクトロニックなR&Bトラックながら3拍子トラックであるということが特徴的で珍しい部分です。これ以前のアルバムでもBonoboは“Black Sands”という曲で3拍子楽曲を制作しており、3拍子が好きなのかもしれません。

さらにこの楽曲“Heaven For The Sinner”で特筆すべきは、冒頭部分に、3拍子トラックの上で、Erykah Baduの歌が4拍子で歌うというポリリズム構造が見られることです。冒頭部以降は歌も3拍子になるのですが、こういったトラックものにしては非常に珍しいリズムへの取り組みといえるでしょう。このポリリズムへのチャレンジが、Bonoboからの提案によるものなのか、Erykah Baduによる提案なのか、興味深い点ではあるのですが、私の検索力では分かりませんでした。

私見ではトラックが先に出来上がっていてボーカルを入れるときにErykah Baduが4拍子で歌ってみた、それをBonoboが採用し、エディットした、というように思えます。他にも細かい部分で、ハイハット/シェイカーの刻みのプログラミングが、ずっと4連符(16分音符)的なのですが、楽曲1分28秒くらいの所の刻み方が5連符化して、グルーブに突如として訛りが与えら、突っかったような感覚になるという細かい仕事に驚かされます。

連載前回のJose Jamesの回でも言及しましたが、現在の(ロバート・グラスパー“Black Radio”以降とでもいいましょうか)、ジャズ・ヒップホップ・R&Bといったブラックミュージックの先端では、ドラマーのクリス・デイヴに代表されるようなクロスリズム感覚、リズムチェンジ感覚が随所に見られるのですが、こうしたリズムによるタイムストレッチ効果、訛り効果は昨今の音楽の聴きドコロのひとつとも言えるでしょう。プログラミングされた電子音楽(ヒップホップやR&Bもそうですが)の世界でもこうした「訛りやゆらぎをいかにして取り入れるのか」というのは2014年もひとつのポイントといえそうです。